

京都人だけが 使っている

6

雨の多いイギリスに住む紳士は、弁当を忘れても決して傘は忘れない——というのは英国人にまつわる数々の誤解のなかでもとりわけ有名なものだろう。実際のところ彼らは昔からまず傘をささなかった。

そもそも紳士は傘なんぞ自分で扱ったりしないからこそ紳士たり得た。彼らは傘が必要な天気外出などしなかった。「どうして」という際は、雨に当りそうな場面では随行する召使いがさしかける。もしくはイザとなれば濡れても構わない格好をする。彼らが傘を携帯するとなればそれはステッキ代わり。紳士にとって傘は無縁の存在である。

そんなわけで伝統的な習慣だからかは知らないが、紳士なんてものがないなくなった現代でも英国人は傘を持たない。これはクラスにかかわらず国民性、雨模様を歩くと、傘をさしているかいないかで英国人が否かがわかるといわれるほどだ。

もっとも雨というものに対する感覚の違いも大きい。確かにイギリスは晴れ間の少ない国ではある。が、ブリテン・アイッシュ・レインの主流はお湿りなのだ。それも長くは続かない。年間平均降水量は七五〇ミリメートル。日本の

約半分。たいがいお帽子やフード、あるいは広げた新聞紙で凌いでしまう。つまり早い話が降られたからってドローってことないのだった。

さて、イギリス暮らしを始める前から私も傘をささない人間であった。べつに召使いがいたわけではな。単に嗜好の問題として、このアイテムが苦手なだけだ。日本の雨は濡れると充分にドローってことある勢いで降るけれど、頑なに帽子で通していた。

困るのは訪問先で実行が怪しくなってきたとき。親切に「返さなくていいから」と傘を貸して下さる。そんなふうにはほとんどと理解を得ることがなかった私の嫌な主客が、いまや堂々と買収できる。移住してよかったですと感謝。そのくらい厭なのだ。

もしかしたら私は英国紳士の生まれ変わりなのかもれない。まあ、この意見は嫌な以上は賛同者が少なそうだけれど。

霧雨小雨ばかりのイギリスだが、年に五、六回は傘の要りそうなドシャ降りに見舞われることもある。たまたま人と会う約束をしていたりすると、さすがに雨を理由に反古にするわけにもいかない。傘の柄を揃って玄関へ出る羽目に陥る。

ところが、である。さんざんシブっておきながら、私は自分の傘を開いたとたん気分がカラリと晴れるのであった。それこそ、まるで傘の内側にだけお日様が射しているようなキモチ。そして、さつきまで深い溜息をついていたのが三浦英史の唄など裏声で歌いつつ歩きたせるのだ。

嘆息を鼻歌に変える傘。それは京都

「日吉屋」さんの蛇の目である。えらく、また、古風な、もとい前世の遺物みたいなものを、と思われるかもしれない。そんなもの、いまじきどこに売っているんだ、とか。ニューアースは違うが、似たような質問は英国でも受けたことがある。「オズワルド・ポーター」のスタイリストに、「キャー！ アナタ！ それどこで買えるの？ 次のショウに使いたいのだけれど」はつきりいつて和傘は洋服にも非常によく合う。そう信じてはいたけれど、このときはニュー・ビスポークの旗手にお墨付きを買えたように嬉しかった。ポーターはカラフルだから特別というわけではない。白い番傘や落ち着いた色味の無地ならばカジュアルでもスーツでもコーディネート可能というか、お洒落として持てる唯一の傘なのであるまいか。と、嫌な家は

思ったりする。個人的には海外の高級セレクトショップに置かれていても、なんの違和感もない。

その繊細な外見とは裏腹に、和傘はとも丈夫。骨は竹ひげを寄せ集めているのではなく厳選された一本の竹を細く裂いて作られている。強さの理由はその辺りにもありそうだが、その骨を御する糸織りの芸術的な美しさ。和紙を透かした光の端やかさ。バラバラと雨粒を弾く音の楽しさ。また、掲げてみるとわかるが、これはとても軽い。

気の遠くなるような工程と高度な技術が結晶した「日吉屋」さんの和傘。折りたたみには決して治らない優雅がある。機能性を兼ね備えた——極めて京都的な——優雅である。職人ワザが生きた工芸品は数あれど、これほど鮮やかに、そのクオリティが使い手に伝わるアイテムも珍しいだろう。

和傘を一から手作りしている老舗は、もはや全国でも数えるほど。京都ですら「日吉屋」さんのみだ。キモノ復活の兆しがほのかに見えるこのころ。どうかこのまま健やかにお洒落を続けていつていたいただきたいと願うばかりである。

日吉屋の蛇の目傘



「日吉屋」京都市上京区之内通堀川東入道々町546
TEL: 075-441-6644
蛇の目傘(無地)21,000円より。

入江敦彦

いりえあつひこ 1916年、京都・西陣生まれ。ロンドン在住。生粋の京都人ならではの視点で描いた「イケズの構造」(新潮社)などエッセイシリーズが話題に。最新刊は『美京町決定』(57年春)、『京味深々 京都人だけが愛している2』(元文社知恵の森文庫)。

撮影/YAYOI